ヒノキカワモグリガの生態に関する研究（V）

― 佐賀県内における食痕の地理的分布と被害歴 ―

林業試験場九州支場　倉永善太郎
熊本営林局　田中　義行
佐賀県林業試験場　竹下　晴彦

1. はじめに

九州地方におけるヒノキカワモグリガの被害実態を明らかにする目的で，その一環としておこなっている分布と被害歴の調査については，既に中間結果[1,2]を報告しているが，今回はこれまで不明であった佐賀県内の状況について概要を報告する。なお，この報告にあたり分布調査にご協力いただいた，佐賀営林署長鈴木行雄技官ならびに武雄営林署長川越一忠技官と，両営林署の係官各位および佐賀県武雄農林事務所小副川登技師に対して厚くお礼申し上げる。

2. 調査の方法

1）分布調査は，県内の山林地帯を2Kmのコドラートに分割し，1983年11月～翌年2月にわたり各区内の一部のスギ林において，食痕の有無と被害程度を無作意に調査した。

2）被害歴については，つぎの4林分から被害木2本ずつを伐倒し，主幹部の食痕を食害年別に全数調査し，被害発生年や被害量の年次変動を調査した。

A：神崎郡三瀬村井手野，民有林，アヤスギ，28年，激害

B：唐津市東山田，公団造林，アヤスギ，26年，激害

C：武雄市武雄，民有林，ミシヨウ（黒芯），30年，微害

D：藤津郡太良町中山，民有林，アヤスギ，30年，激害

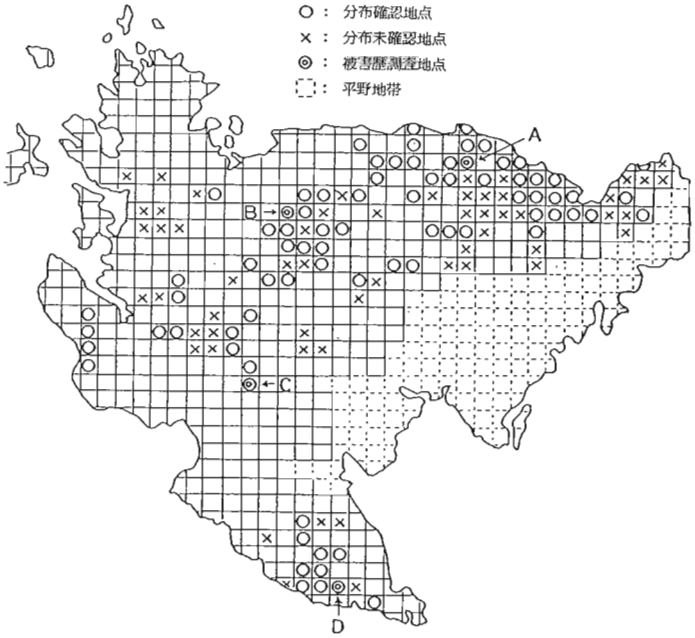
なお，この調査はB・C林が1984年1月，A・D林は同年7月におこなった。

3. 結果と考察

1）食痕による分布調査の結果は図―1のとおりで，被害林分の垂直分布は標高約100m～900mの広域にわたる山林地帯で確認された。特に県北の福岡県境に接する背振山系一帯や唐津市の東部および，県南の長崎県境に接する多良岳周辺などの主要スギ林業地帯において，林分又は単木的な激害を認め，今後これら林業地帯における害虫密度の増加と被害拡大が懸念される。

2）被害歴の調査結果は図―2のとおりで，三瀬と太良の調査木は1970年頃から被害が発生している。これは既報の大半の調査例とほぼ同じ頃であるが，唐津と武雄は数年遅い1976～77年の発生である。

つぎに，被害（食痕）量の増加速度は，三瀬と太良がやや緩慢で，被害発生から10数年後すなわち三瀬は1984年，太良は1982～83年がピークになってい



図―1　食痕の地理的分布

る。しかし，唐津は数年間でピークに達する激増型である。なお，これら調査木のピーク年における食痕数は，太良のa号木以外は約70個以上の激害で，既報の調査例をしのぐ高密度である。また，武雄の被害量は僅かな増加傾向で低密度が維持されており，その原因としては，他の調査木がアヤスギであるのに対して，この調査木はミショウスギ（黒芯）であることや，この林分だけが柑橘園に隣接した特殊な環境であることなどが考えられる。

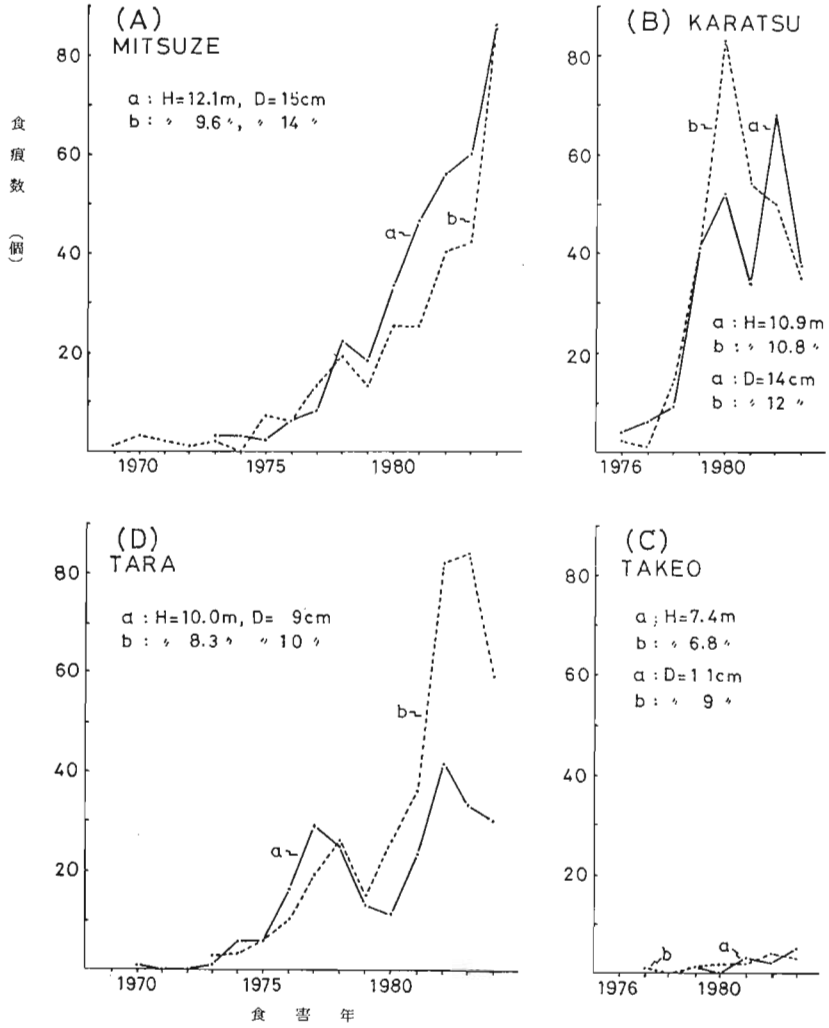
4. おわりに

この調査で佐賀県内でも分布を確認したことから，既報の結果を総合すると，九州地方においては屋久島・種子島・天草などの離島を含めて，沖縄県以外の全県内にこの害虫は分布していることが判明した。しかも各地で激害が発生しており，その被害歴や被害量は林分によって差異が認められることから，今後は被害発生環境や変動要因についても究明する必要がある。

引用文献

(1) 倉永善太郎：林試九州支場年報，25, 51～52, 1982

(2) 倉永善太郎ら：日林九支研論36, 213～214, 1983



図－2　被害（食痕）量の年次変動